

問題一 次の空欄に当てはまる漢字を後の語群から選び、四字熟語を完成させよ。答は符号で示せ。

- 1 意気( )天      2 異( )同音      3 言語( )断      4 ( )心伝心  
5 大器晩( )      6 同( )異曲      7 日( )月歩      8 ( )和雷同  
9 粉骨砕( )      10 危機( )

## 【語群】

A	行	B	句	C	身	D	同	E	昇	F	衝
G	不	H	髮	I	口	J	道	K	以	L	発
M	生	N	付	O	工	P	成	Q	進	R	食
S	異										

問題二 1～5のカッコ内のA・Bの内、敬語の使い方として正しい方を選び、符号で答えよ。

- 1 お昼は何を(A いただく) B 召し上がり)ましたか。  
2 その件は、あちらの窓口で(A うかがって) B お尋ね)ください。  
3 鈴木様がお見えに(A なり) B なられ)ました。  
4 ご努力(A 致された) B なさった)ことでしょう。  
5 こちらに(A 参られた) B 来られた)ご意向をお聞かせください。

問題三 次の短歌の各々について、後の評語群の中から適しているものをそれぞれ二つずつ選び、符号で

答えよ。

- 1 紅くれないあの二尺伸びたる薔薇ばらの芽の針やはらかに春雨の降る 正岡子規  
2 金色こんじきの小さき鳥のかたちして銀杏ぎんぎょうちるなり夕日の岡に 与謝野晶子  
3 ふるさとのなまりなつかし／停車場の人ごみのなかに／そをききにゆく 石川啄木  
4 幾いくやまか山河越えさり行かば寂しさの終はてなむ国ぞ今日も旅ゆく 若山牧水  
5 牡丹花ぼたんは咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ 木下利玄

## 【評語】

- A 望郷の歌  
B 二句切れの歌  
C 三句切れの歌  
D さすらいの旅へのあこがれが感じられる歌  
E 第四句の次に、「あらむ」という言葉が省略されている。  
F 上の句は対象の確な描写。下の句はそれに対する感慨。  
G 倒置法が使われている歌。感動の中心は、対象をロマンチックにとらえたところ。  
H 助詞「の」の多用と句切れのない調べが、歌全体のやわらかさを醸し出している。  
I 秋の夕暮れは寂しさを感じさせるものだという伝統的な考えが、くつがえされている。  
J 作者は俳句の方でつちかかった力量を短歌に移し、みずみずしい写生歌を完成させている。

問題四 次の空欄に春、夏、秋、冬のいずれかを入れ、俳句を完成させよ。

- A 「」瘦やせて腕は鉄棒より重し 川端茅舎  
B 小降りして山風のたつ麦の「」 飯田蛇笏  
C 迎「」や油の氷る壘びんの中 小沢碧童  
D 「」風邪はなかなか老に重かりき 高浜虚子  
E ふかし芋割るや寄り添ふ「」の宿 横光利一

問題五 次の文章を読んで後の問に答えよ。

私の母は病身だったので、私は母の乳は一滴も飲まず、生まれるとすぐ乳母に抱かれ、三つになつてふらふら立って歩けるようになったころ、乳母に別れて、その乳母の代わりに子守として雇われたのが、ただけである。私は夜は叔母に抱かれて寝たが、そのほかはいつも、たけといつしよに暮らしたのである。三つから八つまで、私はたけに教育された。そうして、ある朝、 $\llcorner$  i  $\llcorner$  目を覚まして、たけを呼んだが、たけは来ない。はっと思った。何か、直感で察したのだ。私は大声あげて泣いた。たけいない、たけいない、と断腸の思いで泣いて、それから、二、三日、私はしゃくり上げてばかりいた。それから、一年ほどたつて、ひよつくりたけと会ったが、たけは、変によそよそしくしているので、私にはひどくウラめしかつた。それつきり、たけと会っていない。四、五年前、私は「故郷に寄せる言葉」のラジオ放送を依頼されて、そのとき、あの『思い出』の中のたけの箇所を朗読した。故郷といえは、たけを思い出すのである。たけは、あの時の私の朗読を聞かなかつたのである。なんの便りもなかつた。そのまま今日に至つているのであるが、今度の津軽旅行に出発する当初から、私は、たけに一目会いたいと切に念願をしていたのだ。いいところは後回しという、自制をひそかに楽しむ趣味が私にある。私はたけのいる小泊の港へいくのを、私の今度の旅行の最後に残しておいたのである。(中略)

バスはかなりこんでいた。私は小泊まで二時間、立ったままであつた。中里から以北は、全く私の生まれて初めて見る土地だ。津軽の遠祖といわれる安東氏一族は、この辺に住んでいて、津軽平野の歴史の中心はこの中里から小泊までの間にあつたものらしい。バスは山道を上つて北に進む。道が悪いとみえて、かなり激しく揺れる。私はアミダナ5の横の棒にしっかりとつかまり、背中を丸めてバスの窓から外の風景をのぞき見る。やっぱり、北津軽だ。深浦などの風景に比べて、どこやら荒い。人の肌のおいがないのである。山の樹木も、いばらも、ささも、人間と全く無関係に生きている。東海岸の竜飛などに比べると、 $\llcorner$  ii  $\llcorner$  優しいけれど、でも、この辺の草木も、やはり「風景」の一步手前のもので、 $\llcorner$  iii  $\llcorner$  旅人と会話をしない。やがて、十三湖が冷え冷えと白く目前に展開する。浅い真珠貝に水をモつたような、気品はあるがほかない感じの湖である。波ひとつない。船も浮かんでいない。 $\llcorner$  iv  $\llcorner$  して、そうして、 $\llcorner$  v  $\llcorner$  広い。人に捨てられた孤独の水たまりである。流れる雲も飛ぶ鳥の影も、この湖の面には映らぬというような感じだ。十三湖を過ぎると、まもなく日本海の海岸に出る。

太宰治「津軽」より

問一 次の文は問題文中のどこに入るか。この文の直後に来る文の初めの四字を書き抜くことで示せ。

今でも、その折の苦しさを忘れてはいない。

問二 空欄 $\llcorner$  i  $\llcorner$   $\llcorner$  v  $\llcorner$  に当てはまる語を次の中から選び、符号で答えよ。

A たちまち B きつと C ひっそり D ずっと E なかなか

F 時折 G 少しも H ふと I とうてい

問三 傍線部①⑤⑦のカタカナを漢字に改めよ。

問四 傍線部②での私の気持ちはどんなものであつたか。次の中から適したものを選び、符号で答えよ。

A 落胆 B 確信 C 困惑 D 期待 E 悔恨 F 迷惑

問五 傍線部③が具体的に述べられている十二字の語句を文中から書き抜け。

問六 次は傍線部④に関する説明文である。空欄に適する語を後の語群から選び、符号で答えよ。

「自制」の一般的な意味は「自分で自分の【ア】や欲望を抑えること」であるが、ここでは「いとところは後回し」にすることを内容としている。だから、「自制」とはいうものの【イ】という意味あいではなく、【ウ】を後に残して【エ】楽しもうとする思いの一種である。

《語群》 A 悲しみ B 思いきり C 感情 D 禁欲 E 楽しみ

F 即

問七 次は傍線部⑥に関する説明文である。空欄に適する語を後の語群から選び、符号で答えよ。

風景という言葉は、常に人間の【ア】にあり、人間の【イ】を楽しませる自然といったニュアンスをもつが、この北津軽の【ウ】は、人間とは【エ】に生きているため、「風景」と呼ぶにふさわしくない。

《語群》 A 自然 B 周り C 別世界 D 目 E 無関係

F 世界